

期間 2018年1月10日(水)～ 2018年2月9日(金)
会場 愛知県立大学 長久手キャンパス図書館 1階ロビー
主催 愛知県立大学日本文化学部、
愛知県総務部法務文書課県史編さん室、
愛知県立大学長久手キャンパス図書館
協力 東栄町

<企画展示>

「愛知県史展 花祭り―地域文化に込められた願い―」

「て～ほへ、てほへ」という不思議なかけ声と笛太鼓の音で山間の一軒屋が一晩中賑わい、静かな谷間にこだまする――

仏神事にして里人の祭りである花祭りは、400年あるいは700年の歴史を背負いつつ、今も15地区で生き生きと継承されています。柳田國男、折口信夫、早川孝太郎など黎明期民俗学者たちが瞠目したのは1920年代ですが、里人の生活史ははるか以前からです。霜月祭りとも呼ばれ、くっきりと変化する四季のうち自然の活力が最も衰えるという時期に、神仏との交歓によって人々の生命力を再生させるため、精一杯のエネルギーが発散されます。作られた行事ではなく、創った祭りとはかくあるべし、という感慨を誰しも得るでしょう。

『愛知県史』では、花祭りは「民俗」として重要な位置を占めます。近年は、江戸時代の古文書も数多く見出され、花祭りの中心を担う花太夫はなだゆうが伝える文献には、戦国時代にさかのぼる祭文さいもんなども確かめられています。文学研究や歴史学からも、その奥行きと広がりについてこれからますます解明されていくことでしょう。

歴史遺産、文化遺産、文化財などという場合、ともすれば有名な武将や高級な奢侈品に目を奪われがちです。すべてのものにはそれぞれの意

味がありますが、ここでは生活者庶民が受けついできた祭りに注目し、積み重ねられてきた思いや願いを噛みしめたいと思います。花祭りという個性豊かな文化に接すると、人たるものの普遍的な願いや希望の噴出が感じられます。将来においても顧みられるべき花祭りを見つめつつ、地元で担っておられる皆さんのこの膨大なエネルギーの源を探ることで、人類が本来もっている知恵のようなものに思いめぐらせてください。

なお昨年11月25日、26日に、東栄町^{あしこめ}足込地区の花祭りを見学させていただきました。日本文化学部の「留学生的愛知ガイドづくり」事業の一環としてです。展示品の一部は、この時実際に使用された祭具を頂戴したものです。写真や映像もその際のものであります。ご協力くださった東栄町、特に足込地区の皆さんにお礼申し上げます。

2018年1月10日

日本文化学部長 上川 通夫



愛 知 県 史

原始から現代まで地域の歴史を全58巻にまとめる県史編さん事業は平成6年度に始まりました。

県史編さん事業は、県史を通じて県民のふるさと愛知に対する意識を高めるとともに、多くの貴重な資料を県民共通の財産として後世に残し、学術及び文化の振興に資することを目的として開始されたものです。

平成10年度から刊行を開始し、平成28年度までに、通史編・資料編・別編計50巻を刊行しています。

全58巻の構成

〔通史編〕

原始・古代 中世1 中世2・織豊 近世1 近世2 近代1 近代2 近代3
現代 年表・索引

〔資料編〕

考古1<旧石器・縄文> 考古2<弥生> 考古3<古墳>
考古4<飛鳥～平安> 考古5<鎌倉～江戸>
古代1 古代2
中世1 中世2 中世3 織豊1 織豊2 織豊3 中世・織豊
近世1<名古屋・熱田> 近世2<尾西・尾北> 近世3<尾東・知多>
近世4<西三河> 近世5<東三河> 近世6<学芸>
近世7<領主1> 近世8<領主2> 近世9<維新>
近代1<政治・行政1> 近代2<政治・行政2>
近代3<政治・行政3> 近代4<政治・行政4>
近代5<農林水産業> 近代6<工業1> 近代7<工業2> 近代8<流通・金融・交通>
近代9<社会・社会運動1> 近代10<社会・社会運動2>
近代11<教育> 近代12<文化>
現代

〔別編〕

窯業1<古代 猿投系> 窯業2<中世・近世 瀬戸系> 窯業3<中世・近世 常滑系>
民俗1<総説> 民俗2<尾張> 民俗3<三河>
文化財1<建造物・史跡> 文化財2<絵画> 文化財3<彫刻>
文化財4<典籍> 文化財5<工芸> 自然

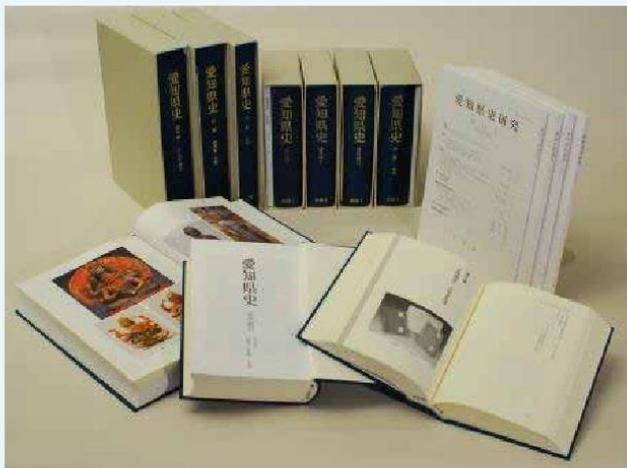


原始から現代まで地域の歴史を全58巻にまとめる県史編さん事業は、平成6年度に始まりました。

県史を通じて県民のふるさと愛知に対する意識を高めるとともに、多くの貴重な資料を県民共通の財産として後世に残し、学術及び文化の振興に資することを目的として開始されたものです。

平成10年度から刊行を開始し、平成28年度までに、通史編・資料編・別編計50巻を刊行しています。

ここでは、花祭りをとりあげた民俗、典籍、近世（東三河）の各巻を中心に据えつつ、既刊の愛知県史すべてを展示紹介いたします。



花祭りの概要

花祭りとは、愛知県の奥三河を中心に毎年11月から3月にかけて行われている伝統ある神事芸能です。1976年（昭和51年）に国の重要無形民俗文化財に指定され、今なお地元住民から愛され継承され続けており、学術的にも注目を集めています。

起源について正確にはわかっていません。しかし、祭りのなかに見られる宗教的要素から、修験道が地方に定着しはじめた鎌倉時代末期ないし室町時代からだとする見方が有力です。その後、伊勢神楽や熊野信仰、牛頭天王信仰なども取り入れながら、江戸時代初期の17世紀ごろに現在の姿になったとのこと。

花祭りには、花宿の清め、神迎え、湯立て、宮人の舞、稚児の舞、少年の舞、青年の舞、鬼の舞、翁の舞、湯ばやし、神返し、といった一連の所作があり、一昼夜にわたって不眠不休で行われます。地元の方々が安全や豊作、無病息災を願って神事に取り組んでおられます。

山村地域の過疎化が進んでいる現代社会において、花祭りは地域の人々の交流がいかに大切か、また無事に毎日を過ごすことがいかに幸せか、といったことを私たちに再認識させてくれます。花祭りを目の当たりにして、地域社会とその伝統文化の意義を見直すことが、未来への発展に繋がるのだと思われま。

花祭りの場と飾り

祭りが始まる日の午後、まず花太夫らは屋外の清水を湯立の水として花宿に迎えます。ついで、祭りが行われる建物の二階にある神部屋では、神々を勧請する儀式が行われます。日暮れ近い時間、舞庭と呼ばれる祭りの中心舞台には竈が置かれ、そのまわりで地固の舞、剣の舞があり、これで舞庭の準備ができます。桴の舞からいよいよ本格的な舞が次々に始まります。その中でも重要なのは、湯立て、鬼の舞、湯ばやし、でしょう。舞は竈を囲うように、子どもや青年、鬼が踊ります。花

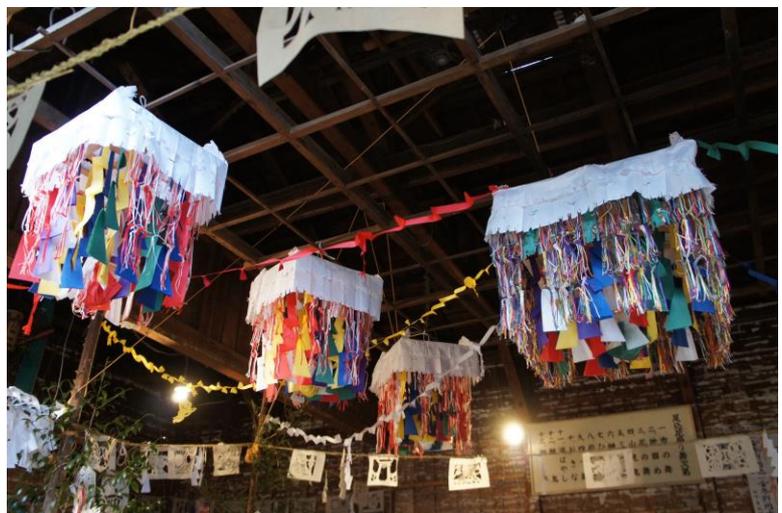
祭りでは、鬼が登場します。^{やまみおに}山見鬼、^{さかきおに}榊鬼、^{もきちおに}茂吉鬼です。それぞれ表情や持ち物が違い、登場する順にも理由があります。

湯ばやしでは最も花宿がにぎわいます。この間に、神部屋の神々は、竈の釜から立ち上る湯煙の中に降り立っているようです。そしていよいよ4人の舞子が釜の熱湯を振りかけるのです。この湯を浴びるとその年は健康に恵まれるとの言い伝えがあります。

花祭りは翌日の昼頃に終了します。この間、舞は次々に行われます。神を迎え、^{さいもん}悪霊を払い除け、無病息災、五穀豊穰、地域安全を願うこの祭りは、祭文の内容、ざぜちや湯蓋の由来、湯立神事や「花」の意味など、まだまだ解明すべき奥深さをともないつつ、現代の奥三河に受け継がれています。



舞庭



湯蓋

＜展示資料解説＞

はなまつりひみつほうくでん 足込花祭 花祭秘密法口伝より

2012年 東栄町足込花祭保存会花太夫柴田吉夫製本 1冊
愛知県立大学日本文化学部所蔵

2005年に河野義人氏から柴田吉夫氏に花太夫職が継承された際、「花祭秘密法大全」なる古文献が伝授された。柴田氏は足込花祭を長く後世に伝えることを意図して、内容を見やすく整理するとともに、漢字ひらがな交じりの現代文に直して本書を作成された。花祭関係者が共有しているというが、「本書の取扱いについては疎漏なきよう十分な注意を払うこととする」と記されている。近世以来の仏神事伝授の伝統と、新時代に引きつごうとする責任感が伝わる。内容は、「花祭次第」、「九字護身法くじごしんほう」や「五印ごいん」という密教的所作、「総神迎そうかみむかえ」や「切目王子きりめおうじ」という仏神を迎える文言である。

足込花祭 神事・舞 司る事

2012年 東栄町足込花祭保存会花太夫柴田吉夫製本 1冊
愛知県立大学日本文化学部所蔵

花太夫柴田吉夫氏が継承した「花祭秘密法大全」の改編版であり、「花祭秘密法口伝より」と一具の本である。舞庭まいどに飾る切り草の種類かたなだて、刀立たきまつり、瀧祭神事つじがため、辻固神事たかね、高根神事かみいり、神入神事あままつり、天の祭神事かまどはらい、竈祓神事ゆたて、湯立神事みやわたり、惣しめおろし、ひいなおろし、しずめ神事、花育て神事、宮渡神事ごほうだて、神がえし、五方立神事げどう、大將軍祭神事、外道がり神事、と続く。祭りの場に仏神を迎え送るためのことばや所作が示されている。儀式次第書そのものである。ただし、花祭りの賑わいの中心と見られている舞や鬼については、ここには解説されていない。

ざぜち

2017年足込花祭り使用 愛知県立大学日本文化学部所蔵

花祭りの会場には、切り草と呼ばれる多種多様な切り紙が飾られる。それらは神々の依り代よしろであり、祭りの直前に毎年新調される。ざぜちは切り草の一種で、舞庭や神部屋などのしめ縄につるされる。切り抜かれる図柄はさまざまで、足込では駒形、鳥居、社、禰宜、巫女、日光、月光、五大尊、かぶ、といった絵型が用いられる。

しめ縄

2017年足込花祭り使用 愛知県立大学日本文化学部所蔵

花祭りは、里人がたくさんの仏神を招いてもてなし、舞い踊りつつ交歓する行事である。神座、神部屋、舞庭といった仏神が降り立つ場は、ざぜちを吊したしめ縄によって清浄に結界される。ここに展示するのは、舞庭にめぐらされたしめ縄であり、四方の柱に結びつけられた青笹に結わえられていた。その結界けっかいの内側では、中央に据えられた竈をめぐって、様々な舞が繰り広げられる。

ゆぶた 湯蓋

2017年足込花祭り使用 愛知県立大学日本文化学部所蔵

舞庭の中央には竈が据えて湯釜が置かれる。竈の上方を始め、舞庭の天井にはいくつもの湯蓋が吊される。まるで仏神とその天蓋のようである。湯蓋の形は花祭り実施地区によって少しずつ違うが、色や形を整えた切り草をたくさん組み合わせて飾られている。五色の紙を重ねて折ったひいな、日月を切り抜いた御幡おはた、網目の紙袋に祓い銭などを入れた蜂の巣、などがある。展示品のうち、大きいものは舞庭の湯蓋である。小さい方は神部屋に吊されたものでびやつけと呼ばれる。

てんじんべい 天神幣

2017年足込花祭り使用 愛知県立大学日本文化学部所蔵

花宿には神部屋という別室があり、舞庭での行事に先だって花太夫らが
仏神を迎える^{あま}天の祭りを^よ行う。そこに神の^{しろ}依り代として立てられるのが五
色の天神幣であり、おり幣や刀立幣も並べられる。天神幣の前には、お神酒、
米を包んだおひねり、粟、干し柿、山芋など75膳が備えられる。花太夫
は、手印を結び真言を唱える密教的所作とともに、東西南北と中央の五方
から「八百万の神」や菩薩、権現、明王などを呼ぶ。

おきなべい 翁幣

2017年足込花祭り使用 愛知県立大学日本文化学部所蔵

花祭りの舞子には、素顔のものと面をつけるものがある。鬼の面をつけ
る舞が有名だが、翁の面をつけ、切り草の翁幣と鈴を持って舞う翁の舞が
ある。この舞には、翁と花太夫との問答があり、即興を含むやりとりのお
かしさが醸し出される。翁とは何者なのか。身近で親しみやすく、また神
と人との両義的な存在。神の依り代である翁幣は、花祭りの賑わいに誘わ
れて思わず姿を現した神なのかも知れない。

鬼の面(複製)

東栄町花祭会館所蔵

昔話などでも親しまれる鬼とは何者なのか。実はなかなかの難問である。
変身した神の姿か、文字通りの怖ろしい異類異形か、人の願望や怨念を形
にした姿なのか。いずれにしても特定の宗教から出たものというより、生
活者民衆の思いに支え続けられてきた内なる他者であろう。花祭にはなく
てはならない鬼は、山見鬼、榊鬼、茂吉鬼といった姿でエネルギッシュに
踊る。展示の面は、特に重要な榊鬼である。榊鬼の踊りは、大地を力強く
踏む^{へんばい}反閔に特徴がある。生命の復活をもたらす鬼である。

鬼の衣装(複製)

東栄町花祭会館所蔵

花祭りの衣装は、面をつけない舞子のものも、鬼のものも、独自の衣装をもっている。展示品は、榊鬼の衣装である。毎年新調されるわらじは、神聖な舞庭を踏みしめるためには欠かせない。いずれも単なる衣装というより、仏神事としての花祭りにふさわしい意味をもっている。

県大生による自治体史への提言

自治体史とは、日本各地の自治体がそれぞれの地域の歴史を保存したものです。愛知県史は全 58 巻が計画されていて、通史編、資料編、別編で構成されています。

自治体史編纂の意義は、まず第 1 に、その地域の人々が自分の目で自治体史を読むことを可能にし、身近な歴史への理解につながることです。2 つ目の意義は、資料の保存にあります。古文書や古記録をはじめ有形・無形の資料を、その地域の財産として残すことにあります。3 つ目の意義は、文化の復興にあります。その文化が失われ忘れられようとしている歴史文化を、自治体史の記録に基づいて後世にも参照することができます。4 つ目の意義は、新たな文化創造です。過去の歴史文化を知ることが、多種多様な新文化を創る手助けになります。

こうした様々な意義を持つ自治体史それ自体が、それぞれの地域にとって欠かすことのできない文化遺産であることがわかります。

~~~~~

自治体史を活発に刊行する理由は何でしょうか。

それは、「日本」という国の中にいくつもの文化や歴史がある、ということを知ることではないでしょうか。小国とも呼べる 66 国が古代から存在していた日本には、それぞれに独特の文化や歴史がありました。愛知県奥三河の花祭りもその一例だと考えます。それらの文化や歴史を、その地

域に住む人だけでなく、他の地域の人や、また留学生や海外の人にも伝えていくことが大切です。また後世に伝えていくには、担い手による直接の継承はもとよりですが、本や写真、映像という形も有効です。つまり自治体史編纂は、地域の文化や歴史を、現地を離れた他地域や他国の人々にまで伝えることにつながります。

ただし、自分の地元の自治体史であっても、それを読む人はあまり多くないように思われます。それは地域への関心が薄れる傾向を暗に示しているのかもしれませんが。しかしせっかく地元の歴史や文化を学ぶことができるのですから、「ただここに住んでいるだけ」で終わらせずに、身近な生活の場への興味をもって自治体史を手にとってみるべきでしょう。そのことで、さらに奥深い歴史文化に触れていくきっかけを作れるのではないのでしょうか。

~~~~~

私は、自治体史には過去の事実を残すだけでなく、将来的な変化に備える役割もあると考えます。自治体史は県や市ごとの歴史的事実や文化の推移を細かく記しているため、当然ながら土地によって内容が大きく異なります。またその土地柄の特徴は、他の自治体史と比較することによってよりはっきりとわかります。

このことの利点は、将来の時代変化への対応をよりの確にする可能性を高めることにつながることにあります。具体的には、たとえば国が法律を施行して地方の仕組みを変えようとする場合、またそのために民意を得る必要がある際など、全国で画一的な方法をとるのではなく、その土地柄を考慮した方法を模索する必要がある。そのような時に、歴史や文化の記録としての自治体史が参考になるでしょう。

また個人的な意見、感想ですが、私は在日韓国人です。以前、授業の一環として、図書館で自治体史を借りた際、在日への差別を禁止した文書がいくつか目にとまりました。たとえばこうしたものに触れることで、ただ生活しているだけでは知り得ない差別の痕跡、またその増加や減少の歴史的な推移を知り、具体的に考えることができる点で、有益なのではないかと考えます。

<映像解説>



〔湯ばやし・釜湯を振りかけ無病息災〕

この映像は、2017年11月25日・26日に東栄町足込地区で行われた花祭りの模様です。

花祭りの一番大事なテーマは、“神と人との交わり”だと私は思います。各地で一般的に見られる祭りとは様子が違い、花祭りは神社や寺ではない場でありながら、その所作は常に神様を人々の中心に置いて行われます。神様に挨拶を申しあげることから始まり、湯釜と湯蓋を中心に、さまざまな形を模したざげち（切り絵）を吊したしめ縄をめぐらして結界を形づくり、その周りを太鼓・横笛・掛け声に合わせて人々が踊り舞います。酒気をも帯びた人々は、その酔い心地の中でまるで神がかりしたかのような境地に至っているのだと私は思います。

実際に花祭りを見た私の実感として、もう一つのテーマは“平等”ということだと思います。見学に来た私や留学生たちに対して、地元の人たちは何のためらいもなく舞の輪に加えてくださいました。そこには、よそものというような概念はないのかもしれませんが。舞の輪に加わることで、私たちもその場の共同体と一つになった気がしました。神々と舞っていることを思えば、私たちそれぞれも一介の人間に過ぎず、出自や経歴などの違いは小さいものであると感じました。

※ 解説文とキャプションは、日本文化学部教員及び学生が執筆しました。